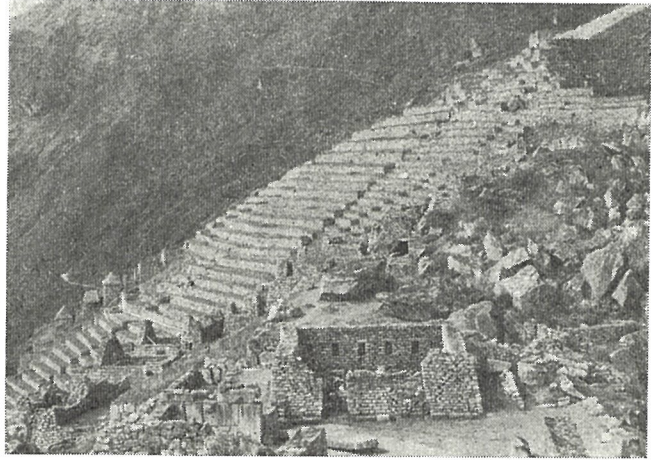


インカの末裔たち

宮本光将



インカの遺跡・マチュピチュ

同志社山岳会は同志社創立九十周年記念行事の一環として一九六五年三月より十一月までペルーアンデス・アマゾン学術調査隊を組織、私も隊員として参加し、無事全目的を終えて帰国した。ここでは遠征を通して気づい

たペルーの先住民民族であるインディオとマチゲンガ族について述べてみよう。

インディオ と白人

コロンブスが十五世紀末にアメリカ大陸を発見したとき、そこをインドと間違え、その原住民をインド人すなわち英語でインディアン、スペイン語でインディオと呼んだが、今でもやはりインディア、インディオと呼べられている。しかしここではアメリカ大陸に住む各種の先住民民族をひっくるめていう広義のインディオではなく、ペルーで普通ケチュア族を指してインディオと呼ぶ狭義のものである。

およそ二万年前、すなわち氷河期の終り頃

まだペーリング海峡が出来ていない時代に蒙古系民族が移動して、アメリカ大陸の先住民となったといわれている。その後各地に定着した彼らは、中米でマヤ・アステカ文明そしてわれわれが行ったペルーにインカ文明を独自に築きあげたのである。プレ・インカ文明は紀元前九世紀頃のチャビン文化よりつぎつぎと発展し、ついに十四世紀末頃より巨大なインカ帝国をつくりあげたのであるが、この大帝も、有名なフランシスコ・ピサロのひきいる二百人たらずのスペイン軍に征服せられ、一五三三年、最後の皇帝アタワルパの死によって崩れさった。このような歴史的背景を持つケチュア族について、私なりに一種の尊敬の念さえ含んだ先入観をもって日本を離れたのであった。わが隊の上陸地カイヤオ港および首都リマ市で気づいたことはまずメステイソ（白人とインディオとの混血）の存在であった。われわれの滞在したホテルは中国人街の一角にあり、近くにバザール（市場）があった。早朝より夕刻まで多くのインディオが集りワイワイと非常にやかましい。その汚い市場で見る客も商人も皆んなインディオだと初めは思っていたが、大部分はメステイソ

であるという。そしてここでは白人は見かけない。市の中心にあるショッピングセンターに行けば反対に白人ばかりである。ヨーロッパ風によく整備された高級住宅街は白人、ゴミゴミした市街地にはメステイソ、そして市のはずれにある丘には泥壁づくりのインディオの小さな家がびっしりとはりついている。これがリマ市の姿であった。ペルーの人口構成は六割近いメステイソと三割ほどのインディオ、一割ほどのスペイン系白人でなりたっているというが、その一割ほどの白人がこの国の上層階級をかたちづくり、完全に支配しているらしい。なるほど市街を走る高級乗用車に乗っているのは白人ばかりである。インディオ、メステイソにはバスがせい一杯、それもボンコツ寸前の乗り合いタクシー（コレクテイボという）である。

もちろん、この国では人種差別はない。しかしトラックに乗ってリマを離れ山岳地帯に向かう旅になって少し気にかかることがあった。それはペルー文部省の斡旋で雇った山案内人に対する運転手の態度である。なんら主従関係など無いはずの案内人に対して助手を使うと同様に働かせ、案内人も当然のように

「シーセニョール（ハイ旦那様）で使われている。山案内人は彼ら内ではインテリに属し、インディオに対しては非常に強腰で向かうのであるが、他の白人に対しては必要以上に腰が弱く、最後までわれわれにはがゆい思いをさせた。彼はメステイソとインディオの混血であり、運転手がスペイン系白人であった。

ケチュア族気質

われわれの最初の目的であるサルカンタイ峰（六三〇〇メートル）へのキャラバンルートの出発点であるモエパタ村に到着すると更にインディオの実態がはつきりしてきた。高度二五〇〇メートル附近にあるこの村は三〇〇〇人ほどの人口を持っているが、九割以上がインディオであり、数少ないメステイソとアツシエンダ（荘園）の白人一族に完全に支配されており、大部分の村人はこのアツシエンダの小作人である。ペルーの農地牧場は大部分がこのような荘園に属し、土地の売買にはインディオの小作人何家族付きで売買されるといわれ、まるで農奴である。その生活も貧しく、石やアドベ（泥レンガ）づくりに薬ふきという汚ない、日のささぬ薄暗い家に家畜

と共に暮らしている。収獲の八割近くを荘園に吸取られているといわれている。われわれはこの荘園の世話になったが、客人であるわれわれにさえ、路上での「今日は」の挨拶の後に必ず「旦那様」をつけ、目があつてもすぐ下を向いておどおどしていた。荘園横に設営したキャンプ地では、いつも素足でポロポロのボンチヨ（彼ら特有の貫頭衣）をまとった子供たちが遠まきにしていて、不要になつた空箱や空カンを奪いあつていた。

さて、ここより四十頭ほどのムーラ（馬とロバの混血馬）でキャラバンを組み、山へむかつたのであるが、ベースキャンプに着いた時帆布シートが一枚見当たらないのでインディオの馬方にたずねると、遠くの岩陰にかくしていたのを引張り出してきて「これですか、しまっておきましたよ」と平然としていたり、キャンプ地にやって来たインディオに懐中電灯を貸したところ、翌日には落して失くしてしまつたと言いはり、さんざん責めたてるとケロリとしてボンチヨから取り出して返し、呆然としているわれわれを、返したんだからもう怒る権利は無い筈だ、なぜそんな顔をしているのかわからない、と言わんばかりに平

気で見返していた。彼らインディオたちの道徳観念は盗られる方に落度があり、見つかった時は返せばそれで問題ないものと決めており、余りにさばさばしているのにはこちらが感心させられる。インカ帝国時代は盗みは最大の悪徳として敵にいましめられていたと聞くが、そのモラルはどこへいつてしまったのだろうか。

クスコの街

サルカンタイ峰の登頂を終えて、いったんクスコ市に戻り、全員で休養を取ることにした。クスコは昔インカ帝国の首都として数千キロ四方にわたってその威を誇っていた所だが、今も市街や近郊に往時をしのばせる精巧な石垣や巨大な岩跡が残っているが、その住民ケチュア族やアイマラ族の貧しさはどうだ。先祖が残した石畳の上をうす汚れたポテンチヨをまとい、うつろな目をして歩く姿には昔の面影を見出すことは出来なかった。このバザールもまた汚なくやかましいが、われわれにとっては面白いところであった。市場の建物の中に入りきれないインディオたちはそのまわりに露店を開き、地方からきたイ

ンディオは道路わきに坐り込んで自分たちの商品をならべるのであるが、その商品のひとつひとつに彼らの貧しさがあらわれていた。しなびた小さいジャガイモを売るインディオ

使い古して空ビンを売る者、カメに入れたマテ茶の一杯売り、サトウキビを五六本かかえて立っている者、リンゴ、ミカン、バナナといういろいろ売ってはいるがその手持ち商品の量の少なさにまず驚かされるのである。この

一角には観光客相手の土産屋もあるが、この買物でも要領が必要である。彼らの言い値は二倍近くふっかけてきたものであるから、

執拗に値切らなければいけない。アメリカ人観光客などはよく言い値で毛皮などを買っているが、彼ら商人にとっては上得意であるらしい。私などは毎日のように行って値切り、

彼らとすっかり友達になってしまった。彼らにいわせれば言い値で売られればそれだけ儲けであり、値切られてももともとであるとい

う。言い値で買っていくアメリカ人観光客は馬鹿であり、われわれ日本人は非常に賢明だそう、変なところで愛国者になった。こんな調子だからタクシーに乗るにしても必ず事前

とみるとむやみにふっかけられる。もちろん、これはインディオだけでなく南米諸国全般にわたっていえることだが……。

マチゲンガ族のくらし

クスコで隊を二分し、再び山に向かう隊員たちと別れて、私は江上隊長、安部カメラマン、沢隊員と共にいよいよアマゾン河源流をゴムボート二隻で下降の途についた。日本ではこの流域について調査資料もなく、わずかにわれわれが下るウカヤリ川にマチゲンガ族といわれる種族が住んでいるらしいという程



インディオのバザール



クスマを着たマチゲンガ族の女

度しかわからなかった。少し北方にはサンサ首（人間の頭をこぶし位に干し縮めたもの）作りで有名なヒバロ族や宣教師五人を皆殺しにして名をはせたアウカ族等、野蠻で獷猛な種族が知られているのみで、ある先輩から「彼らの吹き矢や毒矢に対する処置を考えているのか」などとおどかされたりした。激流下りの危険もさることながら、未知の人種に

対する不安があつて、ベルーについてからも出来るだけ調べようとしたが、クスコでもよくわからなかった。しかし、彼らマチゲンガ族との出会いはあつけないものであつた。なんと河に乗り出す前にわれわれのチャーターしたトラックに一家族が便乗してきたのである。普通のワイシャツ、ズボン姿に大事そうに抱えているトランジスタラジオが日本製で彼の便乗組のインディオと少しも変りがなく少し顔つきが異つているのみである。ボートをおろす前に、この河に少しはくわしいらしい船頭を雇うことができ、様子も大体判つたのでまず安心であつた。コリベニよりゴムボートを乗り出してつぎつぎとマチゲンガ族に出合つたが、一日二日の間はワイシャツ姿ばかりで、あれほど心配していたのと反対にものたらない感じさえする始末。しかし三日四日と急流を下り、河上の文明圏を離れるにつれ、クスマとよぶ丈の長い、脇をかがりつけた貫頭衣を着て、弓矢をたえずさえたマチゲンガ族に接触しはじめた。柱と屋根だけの彼らの家は岸辺の小高い所にあり、河面からは見分け難く、ただ彼らの唯一の交通機関であるクリ抜きのカヌーを岸辺に見かけて始めて

村落の存在が確認出来るのである。われわれがゴムボートを接岸し、部落といつてもたがいがい二、三戸に登つてゆくと、大部分はかくれてしまい、マツチやガラス玉の首飾りなどをプレゼントしたり珍らしいものと交換したりしていると、安心したのか奥の密林よりいつのまにか出てくるようである。はじめは気味悪く感じたものだが、彼らの性格が温順、素朴であることが徐々にわかつてきたので気楽になつた。彼らの家は簡単なものは四本柱と岸辺の葦でふいた屋根のみで、立派な方は高床にしたり木皮で壁をつくつたりしている。どちらにしても風通しよよい単純な家で、周囲に主食であるユカ芋やバナナを植え、男は弓矢で魚やバク、鹿、イノシシ等を狩つたり、川に毒物を流して村中繰出で魚を手づかみにしたりする。女は野生の綿を集めて糸につむぎアチョーテと呼ばれる赤い木の実で染め、原始的な手織りで何ヶ月もかけてクスマを作つたり、ユカ芋島の手入れなどをして暮らしている。

灯火もないので日が暮れると眠るだけ。一度起した火は、大事に一日中いや何日間も絶やさずに燃していた。もちろん貨幣経済は存

在せず、自給自足であり、猿の歯や木の実と共に首飾りの一部としてのコイン（硬貨）を見かけたのみである。マチゲンガ族は余り語彙もないのであろう口数少なく笑い顔も見せないが、性格はおとなしくて気前よく、突然に訪問したわれわれにバナナ酒やユカ芋、パイア等をふるまったり、われわれがほしがる弓矢やザルをマツチや首飾りと交換してくれた。彼らには所有欲というものがないのではないか？と思わせるほどである。後に出会ったカンパ族もまた少し精悍な顔つきで、陽気ではあったがやはり親切で無邪気であり収集品さがして血眼のわれわれが恥ずかしいくらいであった。

文明と未開の間

この自然の楽園にも文明の光は少しずつさして来ている。河上に出るにも河下の文明地に出るにしても、カヌーで一週間下ればのぼるのに三週間も一ヵ月間もかかるところではあるが、布数のためにドミニカ・ミッシェン系やアメリカに本部を置くS I L（未開民族に語学を教育し、聖書をませようとする布数団体）の宗教活動が、国の奥地開発計画と結

びついで水上飛行機等を使用して地道に駆動していた。しかし河筋の教会やスペイン語学校の所在の地点のみはいくらか開けてはいるがそこより三十分も降れば、また昔ながらの原住民の生活があり、スペイン語も通じない。ましてこの主流を離れて一歩広大なジャングル地帯に踏みこめば、未開民族が住む土地なのである。

さて河下りも後半に入り、海岸よりのトラック道路がはじめてこの河に接続しているプカルパの町に近づくに従い、住民もチャマス族と変わって、カメラを向けるとそっぽを向いたり、中にはモデル代をくれると手をばす娘まであらわれるようになり、われわれは別世界より帰った浦島太郎のような味気なさを味わったものである。約一ヵ月間の川旅もプカルパにて一応打ち切り、ここに全目的を完了したのである。

その後ボリビアへの旅にでた私は、そこで汽車の一等車のまわりに群がって、白人客から投げられるビスケットのかけらを奪いあっているインディオの子供たちを見て、アマゾン河上流の豊かな自然の中でのんびり暮らし

ているマチゲンガ族やカンパ族の浮世離れした顔つきを思い出さざるをえなかった。一方のケチュア・アイマラ族はその昔巨大帝国の主として君臨していたが、コンキスタドール（征服者）たちに制圧せられ、被征服民族として長年隷属を強いられ、羨望と巧智を教えられて、余りにも開きすぎた格差の底で今も苦しげに生活しているのにくらべて、平和に暮らしているマチゲンガ族、カンパ族に文明、文化をもたらせることが果して彼らにより以上の幸福をもたらすことになるのだろうか、と。

（昭三七大商卒）

